

# 就任のご挨拶



(社)全国土木施工管理技士会連合会会長 小林 康昭

この度、ご推挙をお受けして、全国土木施工管理技士会連合会の会長という、大変大きな重責を勤めさせて頂くことになりました。錚々たる歴代会長のお歴々に引き替え、軽輩の身にとりまして、誠に身の引き締まる思いであります。

ご承知のように土木施工管理技士制度の発足は、昭和44年のことですが、これを全国紙が報じた紙面を、昨日のこのように鮮明に記憶しております。その時、私はインドネシアのスマトラで、ジャングルに埋もれた現場に、数十名の同僚と勤務していたのです。首都のジャカルタからプロペラ機と自動車を乗り継いで14時間以上もかかるような、文字通り文明途絶の地でした。一ヶ月に一度、日本からまとめて届けられる新聞を、皆が待ちかねて、紙面の隅々までなめ尽くすように読みふけるなかに、この土木施工管理技士制度の発足が、報じられていました。

やがて、詳細な通達が、日本から届きました。受験資格がある土木職の従業員たちは、全員、受験するように、との要請が付記されておりました。国内勤務の同僚たちは、挙って受験するに違いない。だが、私たちは、その制度を知ることが出来たのに、その年の第一回目の試験を受けることは出来ないのです。文字通り切磋扼腕、とはこういうことを言うのでしょうか。そのようなわけで、数年後に帰国した私は、間髪を置かずに受験し、幸運にも？首尾良く合格することができました。

この制度が発足した当時、私の周りでは、理解不足も原因して、この制度の誕生を見る目は、必ずしも好意的とは限りませんでした。受験するのが煩わしい。不合格になったら面目を失って恥ずかしい。不合格のリスクを犯して受験しても、合格後のメリットがはっきりしない。などが話題になっていました。そもそも、それまでの土木の世界では、技術者資格が存在しませんでした。資格を必要とする認識もありませんでした。とにかく、経験と勘が幅を利かせる世界でした。工学教育すら、胡散臭く見られていた時代だったのです。当時の土木技術者を取り巻く世界を知る者にとって、昨今の公共工事に求められる厳しき、技術者たちに課せられる研鑽振りは、昔日の感があります。

最近のように公共工事の品質確保が、社会的に大きな関心を集めるようになると、この制度の重要性は、益々高まっていくことは疑いようもないことでもあります。偉大なる先達の方々が果たされてきた数々のご尽力やご貢献には及びもつきませんが、微力ながら精一杯、努めさせて頂こうと思っておりますので、関係者各位の深甚なるご理解、ご協力、並びにご支援を、衷心よりお願いする次第です。